

## ディベートは国語科の総合学習

## 『故郷』ディベートの反省をもとにした『少年の日の思い出』ディベート

文学教材の読解学習におけるディベートは、今回が始めてではありません。以前は中学3年生の『故郷』において、ディベートを取り入れました。その際の反省点として、教科書の本文から離れてしまうということがありました。今回の『少年の日の思い出』でも、そうなってしまうおそれがありました。

そこで今回は、ディベートの注意点として、「文章を根拠に話す」「本文から離れてしまわないように」ということを確認しました。その結果、立論、反対尋問、最終弁論、アフター・ディベートとしての自分の考えの記述を通して、常に教科書本文に基づいた意見の交換がなされていました。

ややもすると、『少年の日の思い出』は道徳的な価値観に基づいた討論になってしまいがちです。エーミールは悪いといった固定的な印象から抜け出せないで終わってしまうことも予想されます。

## 二項対立から多値・多様な読みへ

『少年の日の思い出』のような優れた定番教材を、黙って読み、授業者の一問一答式の問いかけに沿って、ノートやワークシートに答えを書き込むだけの授業にしてしまっただけでは、せっかくの教材の価値を生かすことはできません。

二値的な対立論題をもってして文学教材を読み解かせることに抵抗を覚える方は少なくはないでしょう。しかし、私たちが文学作品を読み解く際に、無意識のうちに、いわゆる二項対立的な構造を活用して読んでいる場合が多くはないでしょうか。

二値的な観点を切り口として、読みを深める過程において、生徒たちは様々な学級内他者の読みに出会い、やがて二値を乗り越え、多値・多様な読みを生み出すようになっていきます。その過程に、ディベート・マッチは存在しています。

## 国語科に求められる授業

一斉形態による文学教材の読解学習では、授業者が提示した学習課題や発問により授業が進んでいきます。自分の考えを基に、ペアやグループ、そして全体での交流がなされることがあります。このグループや全体での交流は、どのくらいうまくいっているのでしょうか。なかなか深まりが見られないことはないでしょうか。

このグループや全体での交流の代わりに、ディベートをもってきてはどうでしょうか。生徒は受動的ではなく能動的に、かつ主体的に活動するようになります。きっと、本文の読み取りに抜けが出るのではないかと危惧する方もいらっしゃるでしょう。ところが、本文に基づいたディベートでは、生徒は実に丁寧に本文を読んでいきます。そこから自分たちの論の根拠を求めます。

国語科に求められている授業を3点にまとめると、以下のようになります。

- 生徒が主体的に活動できるような多様で柔軟な学習形態による授業
- それぞれが自分の考えや立場を言語によって伝え合う場をもつ授業
- 音声言語活動と文字言語活動とを関連づけた総合的授業

これら3つの条件を満たす授業とはどのようなものなのでしょうか。一斉形態による授業においても、様々な工夫を行うことによって、ある程度はこうした条件を満足することも可能でしょう。しかし、言語による伝え合いを考慮すると、ディベートやパネルディスカッションなどによる討論が有効であることが分かります。

ディベートは、読むこと、話すこと、聞くこと、話し合うこと、書くことの総合学習であることが最も重要な点です。これは、文学教材を読み深める授業においても有効だと言えます。